

CHOYA1886

“日経新聞折込みタブロイド誌”に掲載されました

(2018年10月25日号 / 関東近郊判)

J∞QUALITY FOCUS ITEMS **5**

CHOYA 1886のシャツ

世の中には機能やデザイン性を謳ったシャツが多いが、
本当に求められているのは着心地ではないか。
そんな想いが本物志向の日本の伝統シャツを蘇らせた。

手間暇かけたものづくりで
昔ながらの味わいを再現

きちんとした見た目を実現するため、異なるカーブのパーツを立体裁断、立体縫製している。長年かけて培ったこだわりの仕様は生地を選定だけでなく、巻き本縫いの縫製やフラン生地、貝ボタンなど細部にまで徹底。ベストセラーは白無地だが、最近ではトレンドを取り入れた色柄も人気。各13,000円 / CHOYA 1886



明治19年創業の老舗シャツメーカー、チョーヤの伝統を引き継ぎ、昔のシャツの味わいを復刻するため、古きよき日本の手間暇をかけたものづくりを再現。チョーヤ1886が目指すのは、肌触りがよく、柔らかくでありながら、きちんと見えるシャツだ。

そのために取り組んだのが上質な原糸を用い、いちらから生地を開発することだった。古くからの綿織物産地である浜松に残る旧式のシャトル織機を使い、ゆっくりと織り上げた

生地は、自然な光沢があり、シルクのような柔らかさ。テンションをかけず通常の約3倍の時間をかけて織ること、綿本来の柔らかさを肌触りや膨らみのある生地に仕上げた。

また、東洋紡の開発拠点である富山県の工場では、優れた綿花の交配によって生まれた、ハイブリッドコットンの「マスターシード」をオリジナルの糸設計で紡績、ソフトで優しく、なめらかという原糸の特徴を最大限に生かしたこだわりの生地を完成させている。

それらを本物志向のシャツに仕立てるのが、鹿兒島の直営工場だ。日本人の体形を研究した型紙設計による丸みは、長時間着ても圧迫感が少なく、丁寧に裏処理した縫い合わせ部分には、型くずれを防ぎ、端正な外観を保つ工夫が見られる。糸にこだわり、織りにこだわり、風合いと仕立てにこだわる。蘇った日本の伝統シャツが、新たな一歩を踏み出した。

MORIOKA'S SUGGESTION

シャツは消耗品と割り切って
もっと冒険をしてみてもいい



ネクタイよりシャツで遊んだほうがスーツになじみやすく、スタイリングは簡単。ロンドンストライプやチェックのクレリックシャツもスーツやシャツと同系色のノリッドタイを合わせれば、嫌味なくシックにまとまります。